

明治・大正期の大阪落語資料にみる罵りの助動詞について

村中淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

A Study of Auxiliary Verbs of Cursing in Osaka Rakugo Materials of the Meiji and Taisho Eras

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

Key Words: Treatment Expression, Narrator, Listener, Osaka Dialect, Transcribed Data

要旨

明治後期から大正にかけての大阪落語 SP レコード文字化資料を用いて、大阪方言における罵りの助動詞ヨル、ヤガル、クサル、ケツカルについて考察した。ヨルの特徴として、第三者待遇がほとんどであり、叙述的な性質が強く、嘸の語り手に使われるという点が見出せた。クサルとヤガルの使用者が相補的であるという傾向も見られ、クサルは重みのある年配男性、ヤガルは若者あるいは軽劇な男性が使うと考えられた。

1 はじめに

村中（2019）において、大阪方言における罵りの助動詞について考察した。用いた資料は、近世末期の滑稽本「穴さがし心の内そと」であった。本稿はその続編的論文として、明治期および大正期の、大阪方言における罵りの助動詞について考察する。用いる資料は、明治後期から大正にかけての大阪落語 SP レコード文字化資料である。

罵りのことばについては、①一部の人だけが使う例外的なことばであり、②取り上げる価値がなく、つまらないもので、③存在しない方がよく、なくすべきもの、とみる向きもあろうかと思われる。しかし、決してそうではないことを説明したい。

まず、①一部の人だけが使う例外的なことばであるかどうか、について検討しよう。確かに、罵りのことばが下品なイメージを持つことは否定しきれないし、公の場では使いにくいと思う人が多いだろう。特定の人を公衆の面前で直接罵るということになれば、罵られた方は不快で精神的ショックを受ける可能性が高いが、罵った話し手の方も、社会的地位や人間関係にマイナスの影響を被る恐れがある。したがって、たとえ口を極めて罵りたい気持ちがあっても、公衆の面前では自重する人が多いだろう。だが、友人や家族の前で、

あるいは1人である時に、誰かや何かを罵ったという経験は、多くの人にとって稀なものでもないだろう。また面罵ではなく、陰で罵るのであれば、人間関係に重大な結果を招くこともなく、比較的気楽に行えると考えられる。身近な知り合いを罵るのではなく、有名人や何かの事態を罵る（例えば最頂のスポーツ選手や最頂のチームが負けたことを罵る）のであれば、ますます気楽に行えるであろう。つまり、場面や罵る相手との関係によっては、罵りのことばを使うことは、多くの人にとって大いにありうることだと考えられる。

次に、②取り上げる価値がなく、つまらないもの、とみるのが適切かどうかである。罵りのことばは、話し手が、対象となる人や事態を否定的に捉えていることを、ことばの上で明示するものである。話し手が人や物事を否定的に捉えたことの明示を行うということは、すなわち、「貶す」「悪口をいう」「文句」に近いものとして位置づけられる。「悪口」であれば、おそらく時代や地域を問わず、古今東西存在するものである。また、人や物事の悪口を共有することによって、その場の雰囲気盛り上がるということはよくあることであり、気の利いた悪口は人々に歓迎されることすらある。上手な悪口が言えることは、機知に富むことの証明とも言える。つまり、悪口は、特殊なものではなく一般的に存在しうるものであり、発せられる場面・状況によっては、プラスに意味付けすることも可能である。このように考えると、「悪口」に隣接する言語行動である「罵り」も、プラスの意味付けをすることが可能であり、取り上げる価値も出てくるのではないか。

最後に、③「罵り」のことばは存在しない方がよく、なくすべきものかどうか、について検討しよう。何かに対する腹立ち、憤り、やり場のない怒りなどを抱えた時、人は罵りのことばを発する可能性がある。そして、腹立ちや怒りを抱えていることの明示をしなければ、適切な表現をしたと話し手自身が感じられない場合がある。

例えば、大阪の阪神ファンにとっては、「阪神がまた負けた！」ではなく「阪神がまた負けよった!」と言わなければ、気持ちを十分に表せない、と感じることがあるだろう。愛着をも込めた罵りをしなければ、適切な表現にならないのである。あるいは、知り合いの人物がとんでもないことを言った（と話し手が感じた）としよう。この場合、「こんなことを言って!」や「こんなことを言うなんて!」ではなく、「こんなことを言いやがって!」ということばづかいでなければ、自分の気持ちを適切に表現したことにならない、と話し手が感じることはありうる。あるいは、話し手が人物Aと2人である時、その場にはいない人物Bに対して人物Aが憤っていると話し手が認識し、かつ話し手は目の前にいる人物Aの側に立っていることを表明したい場合、「(人物Bが) こんなことを言いやがって」と人物Aに向かって表現することによって、話し手は人物Aに寄り添う意思を示すことが可能である。罵りの助動詞を使って人物Bの動作を貶すことにより、その場にはいないBへの憤りを面前のAと共有しうるのである。このように、動詞に罵りの助動詞ヨルやヤガルを接続させることによってこそ、気持ちや意思が適切に表現できる場合があるとすれば、ヨルやヤガルが存在しない方がよい、とは言えないことになる。

以上のような考えに基づき、本稿では、罵りのことばに関する考察を行なっていく。

2 調査の概要

2.1 調査項目

本稿で調査の対象とする言語項目は、大阪方言での使用が想定される罵りの助動詞ヤガル、クサル、サラス、ケツカル¹⁾、ヨル、の5語である。村中(2019)ではこれにテヤル、テコマスを加えた7語を対象としていたが、本稿では話者以外の動作を表す動詞につきうる助動詞に限定することとした²⁾。以下、先行研究に簡単に言及しておく。

ヤガル・クサル・サラス・ケツカルの4語は、前田(1949)で「相手の動作を口汚く云ふ形」、罵詈雑言としてあげられているもので、郡(1997)でも「見下げて言う表現」として列挙されている。牧村(1979)ではこの4語はすべて見出し語となっており、かつ、それぞれの語意説明の中に他の3語が同義語としてあげられている。榎垣(1962)では、ヤガル、クサル、サラス、の順で憎悪の感情が高まり、ケツカルに至って最高潮に達する、と述べていることから、この4語を同じ意味上の軸に並べうるものとして扱っていることがわかる。さらに、山本(1962)には罵詈雑言表現としてヨル・ヤガル・クサル・サラスがあげられていることから、ヨルも大阪方言における罵り表現として付け加えることができる。

以上の先行研究から、ヨル・ヤガル・クサル・サラス・ケツカルの5語を、いずれも近代の大阪方言における罵り表現とみなし、本稿での調査項目とする。

2.2 資料

本稿で用いる資料は、真田信治・金沢裕之(1991)『二十世紀初頭大阪口語の実態——落語 SP レコードを資料として』（平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究(B)課題番号 01450061「幕末以降の大阪口語変遷の研究」研究報告書）に収録されている作品全て、すなわち落語家8名による計34作品の文字化資料である。

今回扱う落語作品群の特徴としては、短い噺が多いということが挙げられる。このことは、金澤(2016)の注3でも述べられているように、決して短所ではなく、「当時の何気ない世相を描いた小噺やちょっとした作品が多いために、結果的に、当時の実際の話しことばの断片を活写している可能性があり、この点では、言語資料としての長所となっていると考えることもできる」のである。

2.3 方法

34作品全てに目を通し、対象とした罵り表現の出現の有無を確認した。各作品における登場人物、考察対象とする罵りの助動詞を使用した登場人物、および、対象とした罵りの助動詞以外の罵りの表現の出現についても確認し、それらを一覧表にまとめた（論文末尾の【罵り表現一覧表】を参照）。

次の3章では、罵りの助動詞と作品、演者、活用形、他の罵りの表現との共起関係、人物との関係、の結果を順に示し、4章で文例を元に考察し、5章でまとめを行う。

3 結果

3.1 罵りの助動詞が出現した作品の数

34 作品において、罵りの助動詞ヨル、ヤガル、クサル、サラス、ケツカルのいずれかが出現した作品の数と、いずれも出現しなかった作品の数を示したのが表 1、助動詞ごとの出現作品数を示したのが表 2 である。

表 1 罵りの助動詞の出現した作品数 (34 作品中)

いずれかが出現した作品数	18	(曾呂利, 文枝, 枝雀, 染丸, 松鶴, 文雀)
いずれも出現しなかった作品数	16	(曾呂利, 文枝, 文団治, 文三, 枝雀, 松鶴)

*括弧内はそれらの作品の演者を短い呼び名で示した。

表 2 助動詞ごとにみた出現作品数 (34 作品中)

罵りの助動詞	出現した作品数
ヨル	14
ヤガル	11
クサル	4
ケツカル	3
サラス	0

表 1 から、34 作品中の 18 作品、すなわち全体の半分強の作品に、なんらかの罵りの助動詞が出現したことがわかる。また、四角で名前を囲った曾呂利、文枝、枝雀、松鶴、の 4 人は、作品によって、罵りの助動詞を使ったり使わなかったりしていることがわかる。

表 2 から、ヨルとヤガルは今回扱った作品の 3 割ないし 4 割に、クサルとケツカルは約 1 割に現れたことがわかる。サラスは助動詞としては出現しなかった³⁾。

3.2 罵りの助動詞を使った噺家

次の表 3 では、8 人の噺家がそれぞれ、罵りの助動詞ヨル、ヤガル、クサル、ケツカルを使ったかどうかを示した。前項で見た通り、罵りの助動詞のサラスは今回の資料には出現しなかったので表に入れていない。

表3 噺家ごとに見た罵りの助動詞使用の有無

演者とその生まれ年	ヨル	ヤガル	クサル	ケツカル
二代目曾呂利新左衛門 弘化 1[1844]	○	○	×	×
二代目桂文枝 弘化 1[1844]	×	×	○	×
三代目桂文団治 安政 3[1856]	×	×	×	×
三代目桂文三 安政 6[1859]	×	×	×	×
初代桂枝雀 元治 1[1864]	○	○	○	×
二代目林家染丸 慶応 3[1867]	○	○	×	○
四代目笑福亭松鶴 明治 2[1869]	○	○	○	○
桂文雀 明治 2[1869] ⁴⁾	○	×	×	×
使用した演者の人数	5	4	3	2

(使用のある場合は○, 使用がない場合は×で表した.)

噺家8人中6人が, 何らかの罵りの助動詞を使っていた. 罵りの助動詞が出現しなかった2人(桂文団治と桂文三)はいずれも作品が2つずつと, 資料の量が少ない. また文団治の「芝居の小噺」は登場人物が侍に扮する設定で, 文三の「魚売り」は登場人物の1人が儒者の設定であることから, 日常会話を写していないという可能性もある. 多くの噺家は概ね, 何らかの罵りの助動詞を使う可能性が高いと見てよいかもしれない.

ヨル, ヤガル, クサル, ケツカルの4つのうち4つとも使っていたのは, 四代目笑福亭松鶴だけであった. 4つのうち3つ使っていたのは初代桂枝雀と二代目林家染丸であった. 1作品だけの文雀を除くと, 噺家の生まれた年代が下るにつれて, 多くの種類の罵りの助動詞を使う傾向があると言える.

3.3 罵りの助動詞の出現した活用形

ヨル・ヤガル・クサル・ケツカルがどのような形で出現したかを表4に示す.

表4 罵りの助動詞の活用形⁵⁾

	る.	～る+α	た.	～た+α	～て	否定+α	命令形	計
ヨル	25	10	4	5	2	1	0	47
ヤガル	0	6	0	11	5	4	3	29
クサル	2	1	0	0	1	0	0	4
ケツカル	3	4	0	0	0	0	0	7

表4から、ヨル・ヤガル・クサル・ケツカルのいずれも、「る形」か「た形」で現れる場合が多いとわかる。さらに、ヤガルを除く3つ、すなわちヨル・クサル・ケツカルは、「・・る。」のように「る形」の後ろに何もつかない形で文が終わるタイプが約半数を占めることがわかる。ヤガルは他の3つとは異なり、「て形」や「否定形」が比較的多く現れた。また、命令形は、ヤガルにのみ出現した（「～ヤガレ」の形）。文法的にはクサルの命令形「・・クサレ」も可能であると思われるが、この資料にはみられなかった⁶⁾。

3.4 その他の罵りの表現との関連

論文末尾の【罵り表現一覧表】では、罵りの助動詞のほかにも何らかの罵りの表現が出現したかどうかを記した。具体的には、ワレ・キサマ・オノレといった代名詞、アホ・バカ・ガキ・クソツタレ・ヒョットコなどの名詞、動詞のヌカス・ホザク・サラス・ドツキコロス、形容詞のケツタイクソノワルイ、接頭辞ド・ズ⁷⁾・クソ・ブッ⁸⁾、接尾辞メ、終助詞ガ⁹⁾などである。ナグルデ（殴るで）は、罵りと言うよりは脅しの形であるが、罵りの表現として含めた。ダマレ（黙れ）も、単なる命令ではなく罵り的な表現と見なした。

この一覧表から、「罵りの助動詞の使われた作品」と「助動詞以外の罵りの表現が使われた作品」をそれぞれ数えてクロスさせたのが表5である。

表5 助動詞と助動詞以外の罵り表現の出現した作品数

	助動詞以外の罵り表現あり	助動詞以外の罵り表現なし	計
罵り助動詞あり	14	4	18
罵り助動詞なし	2	14	16
計	16	18	34

表5から、罵りの助動詞の出現と、助動詞以外の罵り表現の出現には、比較的つよい相関関係があると見てよいだろう。すなわち、罵りの助動詞が使われている作品においては、その他の罵り表現も使われる傾向があり、罵りの助動詞が使われていない作品では、その他の罵り表現も使われない傾向がある、といえよう。

3.5 罵りの助動詞の話者と待遇の対象

本節では、誰が誰を待遇する時に罵りの助動詞が出現したかに注目して作表した。表6はヨル、表7はヤガル、表8はクサル、表9はケツカルについてである。資料掲載順で作品に通し番号を付し、作品ごとに話者、話し相手、待遇の対象、の組み合わせを示した。例えば表6の一番上の行は、作品「馬部屋」において「語り手」が「聴衆」に向けて話す文脈で、作品に登場するキャラクターの「馬」を、助動詞ヨルで待遇した例が1件あったことを示す。上から2つ目の行は、同じく「馬部屋」において、「語り手」が「聴衆」に向けて、登場人物「丁稚」を助動詞ヨルで待遇した例が3件あったことを示す。

表6 罵りの助動詞「ヨル」の話者と待遇の対象

作品名	話者	話し相手	待遇の対象	第三者○か対者●か	数
1 馬部屋	語り手	聴衆	馬	○	1
1 馬部屋	語り手	聴衆	丁稚	○	3
1 馬部屋	主人	権助	馬	○	1
4 鋌盗人	語り手	聴衆	泥棒	○	1
4 鋌盗人	語り手	聴衆	丁稚	○	1
4 鋌盗人	丁稚	(独り言)	泥棒	○	2
7 動物博覧会	語り手	聴衆	留さん(虎)	○	2
18 蛸の手	語り手	聴衆	蛸	○	5
18 蛸の手	語り手	聴衆	猫	○	2
18 蛸の手	猫	(独り言)	蛸	○	2
21 いびき車	車屋	(独り言)	客	○	1
23 さとり坊主	息子	母	坊主*	○	5
25 電話の散財	若旦那	番頭	旦那(父親)	○	1
25 電話の散財	旦那	番頭	若旦那(息子)	○	1
25 電話の散財	旦那	番頭	芸者(作鶴)	○	1
25 電話の散財	旦那	番頭	体内の水	○	1
26 一枚起請	伯父	甥	甥	●	1
26 一枚起請	伯父	甥	非人	○	1
27 愛宕参り	語り手	聴衆	作	○	2
28 魚尽し	主人	田中	松島(地名)	○	1
31 理屈あんま	語り手	聴衆	太郎兵衛	○	1
31 理屈あんま	語り手	聴衆	長屋の者	○	1
31 理屈あんま	太郎兵衛	(独り言)	自分の胸	○	1
31 理屈あんま	太郎兵衛	(独り言)	あんま	○	2
31 理屈あんま	太郎兵衛	あんま	あんま	●**	1
32 やいと丁稚	語り手	聴衆	やいと屋	○	1
33 浮世床	客	他の客	割木屋	○	1
33 浮世床	割木屋	客	客	●	2
33 浮世床	客	割木屋	本の登場人物	○	1
34 長屋議会	お松	お崎	女房一般	○	1

*「さとり坊主」の「坊主」は複数人いるがまとめて示した。

**対者かどうか、やや微妙である。

表7 罵りの助動詞「ヤガル」の話者と待遇の対象

作品名	話者	話し相手	待遇の対象	第三者○か対者●か	数
2 盲の提灯	盲	主人	目明き一般	○	1
2 盲の提灯	いさみな男	盲	盲	●	2
4 鋌盗人	丁稚	(独り言)	源助や茂七等	○	1
18 蛸の手	たこ	(独り言)	猫	○	5
18 蛸の手	猫	(独り言)	たこ	○	2
18 蛸の手	たこ	猫	猫	●	2
18 蛸の手	猫	たこ	たこ	●	1
23 さとり坊主	息子	母	坊主	○	3
23 さとり坊主	息子	坊主	坊主	●	1
24 日和違い	吉兵衛	(独り言)	易者	○	1
24 日和違い	吉兵衛	(独り言)	周囲の人々か	○	1
25 電話の散財	作鶴(芸者)	母(女将)	旦那	○	1
26 一枚起請	甥	伯父	女	○	1
27 愛宕参り	作	(独り言)	妻	○	2
27 愛宕参り	作	隣人の妻	隣人の妻	●	1
29 笥手討	可内	(独り言)	今の事態	○	1
31 理屈あんま	太郎兵衛	(独り言)	周囲の人々	○	1
31 理屈あんま	太郎兵衛	あんま	あんま	●	1
32 やいと丁稚	丁稚	やいと屋	やいと屋	●	1

表8 罵りの助動詞「クサル」の話者と待遇の対象

作品名	話者	話し相手	待遇の対象	第三者○か対者●か	数
12 近日息子	父	息子	息子	●	1
18 蛸の手	蛸	(独り言)	猫	○	1
31 理屈あんま	太郎兵衛	あんま	あんま	●	1
32 やいと丁稚	旦那	丁稚	丁稚	●	1

表9 罵りの助動詞「ケツカル」の話者と待遇の対象

作品名	話者	話し相手	待遇の対象	第三者待遇○か 対者待遇●か	数
24 日和違い	吉兵衛	(独り言)	周囲の人々か	○	2
24 日和違い	吉兵衛	輪替え屋	輪替え屋	●*	2
24 日和違い	吉兵衛	(独り言)	輪替え屋	○*	1
26 一枚起請	甥	伯父	女	○	1
31 理屈あんま	太郎兵衛	あんま	あんま	●**	1

*吉兵衛の輪替え屋を罵る言葉は、輪替え屋に言っているのか独り言なのか、ややわかりにくい。

**対者待遇としたが、わざと聞こえるようにいう独り言、とも取れる。

4 考察

本章では、用例を示しつつ、罵りの助動詞についての考察を行う。以下、用例の後ろの括弧内は(噺家「作品」話者→聞き手、待遇の対象)である¹⁰⁾。聞き手と待遇の対象が同一の場合は「話者→聞き手」とし、待遇の対象に必ず下線を付すこととする。

まずは、ヨルの例を示す。

(1) <馬1と馬2の会話の後> 馬めはいろんなこと言うてよる。ついにはもし竹すのこが腐りまして、でっちは昼のくたぶれで のたうって寝てよる。竹すのこの腐ったとっから下へダッと落ちよったんで。(曾呂利「馬部屋」語り手→聴衆、馬・丁稚)

(1)では、噺の語り手が、馬が話している様子(この噺では馬が人と同様に話す)や、丁稚が寝ている様子、その後丁稚がすのこから落ちる様子を、馬や丁稚の動作を表す動詞にヨルをつけて、描写している。「言うてる」「寝てる」「落ちたんで」ではなく、「言うてよる」「寝てよる」「落ちよった」と表現することにより、話し手が馬や丁稚に対して軽侮のニュアンスをにじませつつも親しみを込めて語っているように感じられる。

表6を見ると、「馬部屋」だけでなく、「鋌盗人」「動物博覧会」「蛸の手」「愛宕参り」「理屈あんま」「やいと丁稚」においても、語り手がヨルを用いている。しかも同じ人物に対して複数回使っている場合が多い。一方、表7・表8・表9においては、話者が「語り手」の例は皆無である。すなわち、ヤガル・クサル・ケツカルを、語り手が使った例はない。このことから、「語り手が使用しうること」を、ヨルの特徴とみなしてもよいように思われる。おそらく、ヨルが叙述的な性質を持っているため、語り手に使われやすいのではないかと。次の(2)(3)(4)も語り手がヨルを使った例である。

(2) 泥棒「あーさいですか。そりゃ一縁がござりません。さよなら」と俵をかたげて戻って行きよる。夜が明けてみると庭の五斗俵が一俵足らんでなことがござります。

(曾呂利「鋌盗人」語り手→聴衆, 泥棒)

(3) 中じきを取ると大虎とライオンの室が一つに成ったある。虎はガタガタ震うてよる。(曾呂利「動物博覧会」語り手→聴衆, 虎 (=留さん))

(4) 蛸めは砂っぱへ上がってきてグーッと寝込んでしまいよる。漁師のうちに飼うてあつたもんと見えて、大きな猫めが出てきて蛸の前の手をば二本ムシャムシャッと食てしまいよる。(枝雀「蛸の手」語り手→聴衆, 蛸・猫)

このように、語り手は、動物や丁稚や泥棒など、やや軽く扱っても差し支え無さそうな人物や擬人化された動物に対して、親しみのニュアンスのある描写を行いつつ、「～ヨル。」の形で文を切り、次の内容へと進めることで、話を展開させている。

以上、ヨルは他の罵りの助動詞と異なり、語り手が使用可能である、むしろただ単に使用可能というだけでなく、語り手が話を進めていく上でヨルを有効活用している、という様子が観察されたが、他の助動詞にも、話者という点で何かの特徴が見られるだろうか。

クサル(表8)の話者に、「父」「旦那」が見られる。ヨル(表6)にも、話者として「旦那」「主人」「伯父」がある。用例を見てみよう。

(5) そんなことをしくさって 引っ込んでえ。(文枝「近日息子」父→息子)

(6) 要らんとこで義理立てをしてくさる。(松鶴「やいと丁稚」旦那→丁稚)

(7) えらいこと言うてきよったな。(松鶴「一枚起請」伯父→甥)

このように「父」「旦那」「伯父」がそれぞれ目の前にいる人物「息子」「丁稚」「甥」の動作に対して、クサルやヨルを用いている。一方、ヤガル(表7)やケツカル(表9)の話者としては、「父」「旦那」「伯父」が見られない。逆に、ヤガルの話者の中には「息子」「丁稚」「甥」がある。使用例を次にあげる。

(8) 坊主めはまじめな顔しやがって。(枝雀「さとり坊主」息子→母, 坊主)

(9) 起請まで書いときやがってからに(松鶴「一枚起請」甥→伯父, 女)

(10) もぐさ二銭がん くれやがれ(松鶴「やいと丁稚」丁稚→やいと屋)

クサルを「息子」「丁稚」「甥」が用いた例は見られなかった。

ヨルは、「息子」「丁稚」も使っている。次の如くである。

(11) おや 盗人 入りよったで。(曾呂利「鋌盗人」丁稚独り言, 泥棒)

(12) 母じゃ人 見なはれ。あんな大けな目 開きよった。(枝雀「さとり坊主」息子→母, 坊主)

以上のことから、次のような関係が想定できる。

表 10 罵りの助動詞と話者の属性との関係

話者	ヨル	ヤガル	クサル	ケツカル
中高年男性（父，旦那，伯父）	○	×	○	×
若年層以下の男性（息子，丁稚，甥）	○	○	×	△

（使用の有無を○×△で表した。）

ヨルは、年齢や身分や人物像にかかわらず使える語形であるとみてよさそうだ。ケツカルは例が少なく、確たることが言えないが、ヤガルとクサルは、相補的な面があると見てよいだろう。重みのある年配男性は罵りの助動詞としてクサルは使用するが、ヤガルは使用しない。逆に、若者や軽劇な人物はクサルではなく、ヤガルを使用する。そのような傾向がありそうだ。

昭和・平成の上方落語家桂米朝は、その著書『三集・上方落語ノート』において、次のように述べている。

落語の人物表現は微妙な敬語の使い分けで成立していると言ってもよいくらいです。（中略）上品な言葉ばかりでなく、きたない言葉も同様でして、相手を罵倒するときでも旦那の言い方がある。いくら激昂しても、いやしくも船場の旦那が、使うはずのない言葉があるのです。例えば「……しやがる」という語はまず使わない。その場合は「……しくさる」という。「何を言いやがる」ではなくて「何を言いくさる」となる。

この米朝の言と、表 10 の結果は合致する。ただし、「船場の旦那」の位置付けとしては、由緒ある家柄で育ちが良く上品だとか裕福だとかいう要素ではなく、人間的な重みがあり貫禄・貫目を感じさせる年配男性という要素が効いていると考えられる。「近日息子」の「父」は近所の人と銭湯で出会っているようであるし、必ずしも大店の旦那ということではなさそうなのである。一方で、「近日息子」の「父」と「一枚起請」の「伯父」はいずれも落ち着いたのある人物で、息子や甥の間違いを正し、意見している。「一枚起請」の「伯父」は中国の故事を長々と語ることによって甥を説得し、甥が物騒な事件を起こさないよう気遣っている。噺の中で、人生経験豊かで篤実な中高年男性と位置づけられる人物なのだと思う。

ケツカルは、使われる状況が限定的なようである。用例をあげる。

- (13) ほかに男こしらえてそれ時々入れてけつかる. (松鶴「一枚起請」甥→伯父, 女)
- (14) 何ぬかしてけつかるねん 内らから. (染丸「日和違い」吉兵衛独り言, 周囲の人々)
- (15) はっはっはっはっ なんぎしてけつかる. (松鶴「理屈あんま」太郎兵衛→あんま)

(13)は、入れ込んでいた女に裏切られたことを甥が伯父に訴えているところであり、強いまいましが込められているようである。(14)は易者の言葉を信じたばかりに雨に降られてびしょ濡れになった吉兵衛が、周りの人から馬鹿にされていると思っで向かつ腹を立てているところである。(15)はさほど強い罵りではない。理屈っぽさが過ぎて周囲から敬遠されている太郎兵衛のところ流しのあんまがやってきた。太郎兵衛は理屈で凹ませることのできそうな相手がやってきたので内心喜んでいると思われる場面である。つまり(15)は軽い罵りに過ぎない。ケツカルはおそらく本来的には強烈な罵りの意味を持つと思われるが、このように軽く冗談のように使うことも可能なのであろう。

次に、表6・7・8・9の○と●に注目してみよう。各表の●, すなわち対者待遇の割合を分数で表したのが表11である。

表 11 各助動詞の「対者待遇」の割合

ヨル	ヤガル	クサル	ケツカル
4/47	9/29	3/4	3/7

ヨルは対者待遇がごく少なくほとんどが第三者待遇であること、それに対して、ヤガルは約3割が対者待遇であることがわかる。クサルとケツカルは母数が少ないので確実ではないが、ヤガル同様、対者待遇が珍しくないものと思われる。

なお、ヨルの対者待遇4例のうち1例は、次の通り、対者かどうか微妙な例である。

- (16) ようごちゃごちゃ 言いよるなあ (松鶴「理屈あんま」太郎兵衛→あんま)

この前に、太郎兵衛があんまに「早うこっち入らんかい」と強く命じる口調で言い、あんまが「今入ろうと思うてるのえ。思うたり入ったり いつときには出来んもんや」と言い返し、(16)のセリフとなる。音声のない文字起こし資料なので判然としないが、聞こえても構わない独り言、という可能性もあり、だとすれば、実は●ではなく○かもしれない。

したがってこの4つの助動詞は、第三者待遇専用に近いヨルと、対者待遇が珍しくないヤガル・クサル・ケツカルに、二分できるとみてよいだろう。つまり、ヨルは待遇する人物を罵るためのものでもあるが、描写するためのものでもある。一方、ヤガル・クサル・

ケツカルは目の前の相手を罵る、という意味合いが強いのではないか。ヤガルの対者待遇の例は(10)が該当するが、他にも次のような例がある。

(17) やい 気をつけやがれ このひょつとこめが。向こう向いて歩きやがれ ど盲めが (曾呂利「盲の提灯」いさみな男→盲の男)

(18) こら おのれら あんじょうさらしときやがらんもんやさかい ウータラッタ (松鶴「いらちの愛宕参り」作→隣人の妻)

(17)は、勇み肌の男が、ひょこひょこ歩いている盲人の男に向かって、実際に盲であるとは知らずに罵るところである¹¹⁾。命令形のヤガレが連続して出現する。(18)は、いらち(せっかちで苛立ちやすい人間)の作が、弁当を持参してお参りに出かけたつもりが間違えて枕を持ってきており、妻が悪いと思いつんで、独り言で「クソツタレが」などと罵りながら帰宅する。ところが間違えて隣人宅に入ってしまう、自分の妻と間違えて隣人の妻を思いきり罵って、殴るところである¹²⁾。どちらも強い憤りと罵りのニュアンスが漂う。

クサルの対者待遇の例としては、(5)(6)がそうであった。他に次の例がある。

(19) そ 何を言いくさる。(松鶴「理屈あんま」太郎兵衛→あんま)

理屈屋の太郎兵衛が、同じく理屈屋で口の悪いあんまに言い負かされそうになり、捨てゼリフのように言うところである。クサルの出現数が多くないので確たることは言えないのだが、ヤガルほどの本気の罵りの強さは感じられない。とりあえず強く言っておこう、くらいのニュアンスであろうか。

5 まとめ

本稿では、明治後期から大正にかけての大阪落語 SP レコード文字化資料(落語家 8 名による 34 作品)を用いて、大阪方言における罵りの助動詞について考察した。ヨル、ヤガル、クサル、ケツカル、サラスの 5 語を対象としたが、サラスは今回の資料には出現しなかった。

作品という点から見ると、半分強に何らかの罵りの助動詞が現れた。多くの作品に現れた順を示すとヨル、ヤガル、クサル、ケツカル、である。

噺家という点から見ると、8 人中 6 人が何らかの罵りの助動詞を使っていたが、使っていない 2 名は作品数が少なかった。生まれた年代が現代に近づくにつれて、多くの種類の罵りの助動詞を使う傾向があった。

出現した形の点から見ると、「る形」と「た形」が多かった。さらに、ヨル・クサル・ケツカルは、「・・る。」のように「る形」の後ろに何もつかない形で文が終わるタイプ

が約半数を占めていた。ヤガルは、他の3つの助動詞とは異なる特徴があった。すなわち「て形」や「否定形」が比較的多く現れた。また、命令形は、ヤガルにのみ出現した。

罵りの助動詞と、その他の罵りの表現との間には、比較的強い相関関係が見られた。

当該語形を使用する話者との関係を見ると、落語の語り手は、ヨルは使うが、ヤガル・クサル・ケツカルは使わないようであることがわかった。ヨルは対者待遇がほとんどない第三者待遇の助動詞として使われており、このことと叙述的な性質とが結びつくものと思われる。ヨルは重々しくない人物や擬人化された動物に対して、親しみをにじませた描写を行いつつ、「～ヨル。」の形で文を切り、次の内容へと進めて、話を展開させるように使われていた。

ヨルは語り手だけでなく、さまざまな人物によって使われていた。年齢や身分や人物像にかかわらず使える語形であるとみてよさそうだ。

それに対して、クサルとヤガルは使用する人物像が相補的であると見ることもできそうであった。例外もあるものの、典型的には、クサルは貫禄・貫目を感じさせる年配男性が使う、と言えそうであった。噺の中で、人生経験豊かで篤実な中高年男性と位置づけられる人物が、罵りを行う際に使うのがクサルである。それに対して、若者や軽烈な人物は、ヤガルを使用していた。これは家柄や家産に影響されるものというよりは、人間としての重みに影響されるもののようであった。

また、第三者待遇か対者待遇かという点から見ると、ヨルはほぼ第三者待遇専用に近い、待遇する人物を描くためのものという傾きがあるように思われた。ヤガル・クサル・ケツカルは対者待遇の割合がかなりあり、特にヤガルは眼前の相手を罵るという意味合いを強く持つものと思われた。

6 おわりに

大阪方言において罵りの意を持つ助動詞ヨル・ヤガル・クサル・ケツカルの性質の違いは、罵りの強さだけではなさそうである。ヨルは語りの表現効果に関わりがあると考えられ、クサルは決して上品な言葉ではないとしても、話者の人間としての貫禄に関係するのではないかと考えられた。このように、1つの軸だけでは測れない待遇表現の複雑さを明らかにしていくため、今後、ほかの落語資料や小説資料なども用いて、大阪方言についての調査を進めていきたい。

【注】

-
- 1) 村中(2019)では、テケツカルという形式を見出しとして用いていたが、本稿では用言部分のケツカルを見出しとする。
- 2) テコマスおよび罵りとしてのテヤルは、話し手の動作を表す動詞に接続する。
- 3) 本動詞としてのサラスは出現した。
- 4) 桂文雀の生年については Wikipedia による。
- 5) 「やがってん」の形が1件出現した。これは「やがったのだ」の意味であるため、「～た」に入れる方針もありうるが、ここでは「～て」に含めた。また、文字化資料において「やがっ・・・」と末尾が不明瞭とされたものが1件あったが、文脈から判断し「た+α」に入れた。
- 6) 「・・・」に「見され」という語が出現しており、「見くされ」の変形したものではないかとも考えられるが、今回はクサルとして数えていない。
- 7) ズは「理屈あんま」に「ずあんま」の形で出現する。罵りの意を持つ接頭辞のドの音声的変異形で、ドと同様、名詞の直前につくものと思われる。
- 8) ブッは「ぶっ殺す」「ぶっ放す」のように動詞の直前について勢いを強めるものであり、「ぶん殴る」「ぶん投げる」のブンと相補的に分布する音声的変異形である。
- 9) 「この鼻垂れが」や「クソッタレめが」のような、罵りの意を強める「が」である。
- 10) ただし、噺家名は、8名の中での同定が可能な程度に短く略した形にした。
- 11) 現代的な視点からは、相手が実際にそうであるかどうかは別として、「めくら」と罵ること自体に問題があるが、この時代には特に問題とはされていなかったものであろう。
- 12) 現代的な視点からはドメスティックバイオレンスとも言えそうな行動であるが、これもこの時代にはありふれた行動として容認されていたものと思われる。

【参考文献】

- 榎垣実, 1962, 「近畿方言総説」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂, 1-59.
- 桂米朝, 1991, 『三集・上方落語ノート』青蛙房.
- 金澤裕之, 2016, 「現代に繋がる近代初期の口語的資料における言語実態——速記本とSPレコードによる東西の落語を対象として」『国立国語研究所論集』10: 55-84.
- 郡史郎, 1997, 「総論」平山輝男編『大阪府のことば』明治書院, 1-61.
- 真田信治・金澤裕之, 1991, 『二十世紀初頭大阪口語の実態——落語 SPレコードを資料として』(平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究(B)課題番号 01450061「幕末以降の大阪口語変遷の研究」研究報告書)
- 前田勇, 1949, 『大阪弁の研究』朝日新聞社.
- 牧村史陽, 1979, 『大阪ことば事典』講談社。(縮刷再録: 1984, 『大阪ことば事典』講談学術文庫.)

村中淑子, 2019, 「「穴さがし心の内そと」における罵り表現について——助動詞・補助動詞を中心に」『現象と秩序』 10:21-38.

山本俊治, 1962, 「大阪府方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂, 421-494.

(以上, 筆者名 50 音順)

【罵り表現一覧表】

通 番	作品名	演者名	登場人物	ヨル	ヤガル	クサ ル	ケツ カル	その他の罵りの表現
1	馬部屋	二代目曾呂利 新左衛門	農家の主人, 丁稚, 馬2 頭, 権助	主人, 語り手	×	×	×	ワレ, キサマ (以 上, 主人) ウマメ (語り手)
2	盲の提灯	二代目曾呂利 新左衛門	主人, 盲, いさみな男	×	盲, い さみな 男	×	×	ヒョットコメガ, ド メクラメガ (以上, いさみな男)
3	後へ心が つかぬ	二代目曾呂利 新左衛門	男, 女	×	×	×	×	
4	鋌盗人	二代目曾呂利 新左衛門	泥棒, 米屋, 丁稚	丁稚, 語り手	丁稚	×	×	ヌストメ (語り 手, 丁稚)
5	恵比須小 判	二代目曾呂利 新左衛門	源さん, 隠 居	×	×	×	×	ハナタレガー (源さ ん)
6	日と月の 下界旅行	二代目曾呂利 新左衛門	月, 日, 雷, 女中	×	×	×	×	
7	動物博覧 会	二代目曾呂利 新左衛門	留さん, 隠 居, 客, ラ イオン	語り手	×	×	×	
8	絵手紙	二代目曾呂利 新左衛門	清さん, 木 村の妻, 木 村, 宿の主 人, 女中	×	×	×	×	
9	近江八景	二代目桂文枝	易者, 客	×	×	×	×	
10	小噺	二代目桂文枝	男2人	×	×	×	×	
11	たん医者	二代目桂文枝	医者, 婦人	×	×	×	×	
12	近日息子	二代目桂文枝	父, 息子, 近所の人	×	×	父	×	バカ, バカメ (以 上, 父)
13	儉約の極 意	三代目桂文団 治	主人, 丁稚, 向かいの主 人, 番頭, 鰻屋	×	×	×	×	
14	芝居の小	三代目桂文団	佐野, 三浦	×	×	×	×	

論説

	噺	治						
15	天神咄	三代目桂文三	男2人	×	×	×	×	
16	魚売り	三代目桂文三	魚屋, 儒者	×	×	×	×	
17	亀屋佐兵衛	初代桂枝雀	和尚, 佐兵衛, 他の人	×	×	×	×	
18	蛸の手	初代桂枝雀	蛸, 猫	猫, 語り手	蛸, 猫	蛸	×	オノレ, ガキ(蛸), ネコメ(語り手, 蛸) タコメ(語り手, 猫)
19	きらいきらい坊主	初代桂枝雀	和尚, 檀家の奥さん, 女中	×	×	×	×	ドボーズ(語り手)
20	煙管返し	初代桂枝雀	若旦那, 芸者	×	×	×	×	
21	いびき車	初代桂枝雀	車屋, 客	車屋	×	×	×	
22	芋の地獄	初代桂枝雀	和尚	×	×	×	×	
23	さとり坊主	初代桂枝雀	老母, 息子, 盲, つんば, 坊主	息子	息子	×	×	クソヤカマシ, ナグルデ, ヌカス(以上, 息子)
24	日和違い	二代目林家染丸	吉兵衛, 易者, 米屋, 輪替え屋, 菓子屋, 僧, 魚屋	×	吉兵衛	×	吉兵衛	オノレ, ドベタ, ヌカス, アホ(以上, 吉兵衛) アホカイナ(輪替え屋)
25	電話の散財	二代目林家染丸	若旦那, 番頭, 旦那, 作鶴, 女将, 繁八, 芸妓	若旦那, 旦那	作鶴	×	×	
26	一枚起請	四代目笑福亭松鶴	おじ, 甥	おじ	甥	×	甥	ブッコロス, ドツキコロス(以上, 甥) キサマ(おじ)
27	いらちの愛宕参り	四代目笑福亭松鶴	作, 柵の妻, 参詣人, 隣人の妻	語り手	作	×	×	クソツタレメガ, サラス, オノレラ(以上, 作)

明治・大正期の大阪落語資料にみる罵りの助動詞について

28	魚尽し	四代目笑福亭 松鶴	主人（句 者），田中	主人	×	×	×	
29	筍手打	四代目笑福亭 松鶴	主人，可内， 隣家の主人	×	可内	×	×	ダメレ(主人)
30	平の蔭	四代目笑福亭 松鶴	男2人	×	×	×	×	
31	理屈あん ま	四代目笑福亭 松鶴	太郎兵衛， あんま	太郎兵 衛，語 り手	太郎兵 衛	太郎 兵衛	太郎 兵衛	ズアンマ，ワレ，サ ラス（以上，太郎兵 衛）ドピンポー（あ んま）
32	やいと丁 稚	四代目笑福亭 松鶴	やいと屋， 旦那，丁稚	語り手	丁稚	旦那	×	ワレ（丁稚）
33	浮世床	四代目笑福亭 松鶴	客，割木屋， 松公	客，割 木屋	×	×	×	ヌカス，ホザク，オ ノレ（以上，割木 屋）
34	長屋議會	桂文雀	お松，お崎， お婆さん	お松	×	×	×	ケッタイクソノワル イ（お崎）

【編集後記】『現象と秩序』第14号をお届けします。この度、投稿規定・執筆要領の改訂をおこないました。本誌では創刊以来、すべての論考について編集委員の査読を経て掲載してきましたが、その旨を明示しました。詳しくは本誌73～76頁に掲載されている「投稿規定・執筆要領」をご確認ください。

さて、今回も方法・内容ともに多種多様な論考が掲載されています。

第1論文のテーマは「試着」。近年ではヴァーチャルな試着も部分的に可能になっていますが、そもそも私たちは衣服をどのように着ているかをビデオ・エスノグラフィーの手法で分析する重要性に気づかせてくれます。第2論文のテーマは「セクシャル・ハラスメント」。性被害のなかでもある意味で特殊なこの現象を定義づけることの難しさを、「公／私」「客観／主観」を区別する認識の問題から切り込み、被害者の語りがそうした認識の問題を乗り越える「戦術」的な抵抗となりうる点を示しています。第3論文のテーマは「ヒアリング・ヴォイシズ運動」。日本における同運動の輸入過程で生じた説明の変化をつぶさに追いながら、聴声当事者へのスティグマ付与に抗するパッシングと、一貫した当事者利益の可能性が見出されています。第4論文のテーマは「罵り言葉」。大阪方言における罵りの意を持つ助動詞の違いを待遇表現の観点から読みとくことで、たんに言葉自体の強さだけでなく関係性における意味の違いを明らかにした論考です。第5論文のテーマは「人権社会学」。『〈当事者宣言〉の社会学』（2021年、東信堂）を、日本ではまだ馴染みのない「人権社会学」の書として読むと、どのような視座が拓かれてくるかが考察されています。

いずれも日常生活に気づきをもたらしてくれる論考です。ぜひご堪能ください。（H.Y.）

『現象と秩序』編集委員会（2021年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（愛知学泉大学）

編集委員：檜田美雄（神戸市看護大学）、中塚朋子（就実大学）

編集幹事：川上陵哉（神戸市外国語大学）

編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第14号 2021年 3月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（檜田研）、e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>